一門の大名跡を受け継ぎながら、自分だけの芸を追い求める

林家正蔵氏

落語家

Shozo Hayashiya _1962年東京都生まれ。77年実父・林家三平門下に入り、こぶ平を名乗る。78年高校入学と同時に落語協会に登録。81年、二つ目に昇進。88年13人抜きで真打ち昇進。2005年3月、祖父の名跡である正蔵を襲名。NHK「笑いがいちばん」の司会をはじめ、テレビ、ラジオでも活躍。05年より城西国際大学客員教授を務めている。また、無類のジャズ好きとしても知られる。

CAREER CRUISING

キャリア・クルージング

Interview = 大久保幸夫、泉 彩子
Text = 泉 彩子（56～58P）
大久保幸夫（59P）
Photo = 那須野公紀

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。
人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探すため、
各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

タレントとしても活躍し、「こぶ平」時代からの親しみやすいキャラクターでお茶の間に愛されている。近年は古典落語での評価も高まり、2005年には祖父（七代目）が名乗った名跡、九代目・林家正蔵を襲名。今や落語界の将来を担う噺家の１人として注目される正蔵氏だが、「昭和の爆笑王」と呼ばれた初代・林家三平を父に持ち、「自分の芸とは何か」と迷い続けた時期もあった。

父がくれた「こぶ平」という名を大きくしていこうと生きてきた

６歳で初めて高座に。小三平の名で「笑点」の「ちびっ子大喜利」などテレビに出演する機会も多かった。

「子どもがやれば、うけるんですよ。どんなにつたなくても。それがいつしか快感になり、やめられなくなりました。父に『落語家になりなさい』と言われたことはありません。うまい育て方をしたものですよね」

父・三平に入門し、15歳で落語家に。「こぶ平」の名は、父がつけた。由来を正式に聞いたことはない。名前をもらったときに父が言ったのは、「自分の名前を大きくしていきなさい」というひと言だけだった。

「父は、七代目・正蔵を父に持ちながら、前座時代に名乗った『三平』という名のまま、江戸落語のなかで『三平落語』なるものを築き上げました。ですから、自分の芸を自分で作るという意識を子どもにも持ってもらいたかったんでしょう。以来、私はずっと『こぶ平』という名を大きくしていこうと生きてきましたね」

17歳で父を亡くし、初代・三平の惣領弟子である林家こん平門下に。真打ちに次ぐ位である「二つ目」昇進後は、落語家として芸を磨く一方で、見聞を広げるために、新内を習ったり、当時隆盛だった小劇場の公演に足を運んだ。実は、劇団WAHAHA本舗の設立にも参加している。劇団WAHAHA本舗は、観客と一体となるエネルギッシュなステージ構成で人気があるが、下ネタが多い。

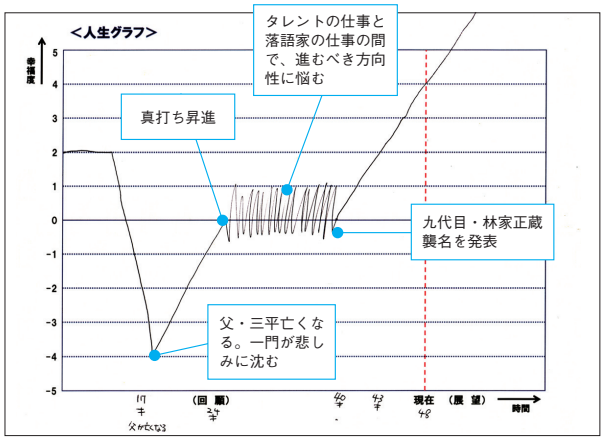
「林家は下ネタが禁止なので、親には内緒だったんです。でも、ある日、バレましてね。林家を取るのか、下ネタを取るのかと（笑）。短い間でしたが、プロ意識を学ぶいい経験でしたね。故郷から出てきて、体を張ってお笑いに取り組んでいる先輩たちの姿に刺激を受けました」

その後しばらくは、テレビのバラエティー番組をはじめ、落語以外の活動が目立つようになる。

林家正蔵氏　キャリアヒストリー

1962年	0歳	東京都台東区に初代・林家三平の長男として誕生。祖父は七代目・林家正蔵。本名、海老名泰孝
1977年	14歳	父・林家三平に入門。こぶ平を名乗る
1978年	15歳	都立竹台高校入学と同時に落語協会に登録
1980年	17歳	父・三平没後、林家こん平門下に入る
1981年	18歳	二つ目に昇進。新内（浄瑠璃の一流派）を習い始める。この後、タレント活動にも力を入れ始める
1984年	21歳	劇団WAHAHA本舗設立に参加するが、ほどなく退団。85年にはテレビアニメ「タッチ」にも声優として出演
1988年	25歳	史上最年少（当時）で真打ち昇進。親子3代の真打ちは落語会初。89年浅草芸能大賞新人賞、91年国立花形演芸大賞古典落語金賞を受賞。テレビのレギュラー番組も多く抱え、忙しい日々を送る
1999年	36歳	この頃から古典落語のネタおろし会を重ねる
2001年	38歳	「読売GINZA落語会」のトリを務め、評判に
2002年	39歳	九代目・林家正蔵襲名を発表する
2003年	40歳	春風亭小朝氏、笑福亭鶴瓶氏ら東西の落語家6人で「六人の会」を結成
2005年	42歳	九代目・林家正蔵を襲名。現在は年間420回の高座を盛り上げ、満員御礼の人気を博している

機が熟しての襲名パレード。期待に応えるべく、この後も、より芸に磨きをかける



直筆の人生グラフ。17歳で父が亡くなり下降。真打ち昇進後も、落語家として進むべき道に迷ったが、正蔵襲名の話を受けて「腹が決まり」、その後は上昇。

「お前は三平にはなれない」
志ん朝師匠の言葉が迷いを消した

「あいつは、幹の太い話し方をする。これからが楽しみだ」――。25歳での真打ち昇進は、正蔵氏の古典落語を評価した柳家小三治師匠のつるのひと声で決まった。

「新作が得意だった父とは違う、古典落語をほめていただけたのは、私にとって大きな出来事。おぼろげながら、落語家として進むべき道が見えたような気がしました」

落語への思いは強まったが、タレント活動が多忙を極めて落語の研鑽を積めず、葛藤した。30代半ばからは自宅で古典落語のネタおろし会を開催するなど地道な努力も重ねていたが、寄席に立って客受けするのは、父の思い出話や物真似などを中心にした漫談。「僕って何だろう」と自問自答を繰り返した。そんなとき、古典落語の名手・古今亭志ん朝師匠との対談の機会があったという。

「落語家になろうと決めた少年時代、僕には『志ん朝師匠のようになりたい』というあこがれがありました。その師匠が『俺はね、父親（志ん生）にはなれないから、違う道を歩んできた。お前も三平にはなれない。お前には古典のほうが向いているよ』とおっしゃった。『古典をやろう』と腹を括ったのは、そのときです」

九代目・正蔵襲名の話が持ち込まれたのは、その翌年。「正蔵」と言えば、「留め名」と呼ばれる一門最高位の名跡。重責に身震いしつつも、次の瞬間には、「よろしくお願いします」と頭を下げていた。

「『こぶ平』はみなさんにかわいがっていただき、父からもらった名前を大きくするという目標も、少しは成し遂げられたのではと自負しています。だからこそ、タレントのイメージの強い『こぶ平』よりも、『正蔵』として落語の本質により近づきたいと思ったのです」

目指すは「長距離ランナー」
全てを糧に表現者としての感性を磨く

実は、襲名の話は以前も持ち込まれたことがあるが、「そんな力量じゃない」と母が断った。ちょうど先述の自宅でのネタおろし会を始めたころだ。

「その独演会の１回目は忘れもしません。15人ほどのお客さまの前で、緊張して絶句してしまったんです。それを聞いていた母が、全てのお客さまに頭を下げながら、

入場料をお返しました。父のキメ台詞の『どうもすいません』と書かれたキーホルダーを添えて……。両親に申し訳なくて、泣けました」

その後は寝る時間を削り、テレビのロケや収録の合間にも稽古に励んだ。独演会は回を重ねるごとに観客が増え、ホールを満員にするまでに。古典落語への真剣な取り組みに共感した先輩や仲間が助言をくれ、有志で開催する落語会にも呼んでくれた。その精進が師匠・こん平や母に認められ、襲名が決まった。機が熟したのだ。

だが、順風満帆とはいかなかった。襲名決定後、世間の評価が急に厳しくなり、真っ正面から古典落語をやり続ける正蔵氏に対し、「目新しさがない」という不満の声も聞こえるようになったのだ。それでも、正蔵氏の古典落語を大切にする思いは変わらなかった。

襲名までの３年間は、タレント活動も続けながら、義太夫や横笛、日舞を稽古。ネタも100噺ほど増やし、襲名後は２年以上かけて全国約60カ所以上で襲名興行を開催した。どの会場も評判のうちに幕を閉じた。現在は年間420回の高座に上がり、現代感覚を盛り込んだ古典落語に定評がある。

「大きなお披露目をやると、どの世界でもすぐに結果を求められます。でも、自分では焦りがないのです。私は若さや勢いなど瞬発力が求められる語りには向かないタイプですから、目指すは落語界の『長距離ランナー』。60歳くらいで花開けばいいかなと。それまでに表現者としての技量を磨いていかなければと思います。落語は人間のことを語ります。自分の人生経験の全てが糧になりますから、『お楽しみはこれから』なのですよ」

■ 林家正蔵氏のキャリアをこう見る

芸の熟達の陰にいる多様な「心の師」

大久保幸夫
ワークス研究所　所長

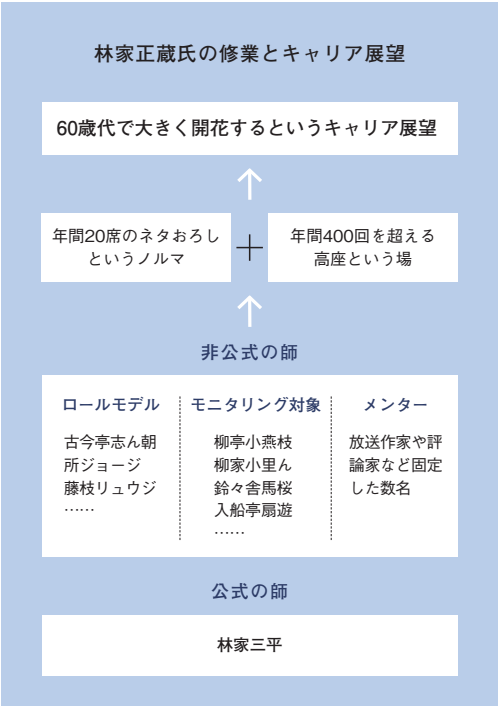
2005年に九代目・林家正蔵を襲名して、古典落語の話芸に精進する正蔵氏には、3つの分野で「心の師」とも言える人々がいる。

落語家として弟子入りしたのは父親である林家三平師匠だが、入門してわずか2年で他界してしまった。公式の師匠から指導を受ける時間が短かった分、自身の成長のために、「心の師」とでも呼ぶべき非公式の師匠として多くの人々と交流を重ねてきたのである。

まず表現者としての生き方や型というものを学んだ「ロールモデル」としては、故・古今亭志ん朝師匠がいる。「面白くて、かっこいい」噺家として正蔵氏が子どもの頃からあこがれてきた人だ。加えて、タレントの所ジョージ氏やグラフィックデザイナーの藤枝リュウジ氏らも、同じ表現者としてその生き方をモデルにしているという。これが第1の師。

そして、今なお年間20席のネタおろしを自分へのノルマとしている正蔵氏だが、落語は直接伝承する芸であるため、それぞれのネタを教えてもらう師匠が必要になる。玄人をうならせる燻し銀の芸を持つ諸先輩方で、柳亭小燕枝、柳家小里ん、鈴々舎馬桜、入船亭扇遊などの師匠連である。彼らの噺を「モニタリング」して一旦そっくりまねて、そこから自分の芸へと作り込んでゆく。これが第2の師。

さらに、落語に精通している放送作家や評論家などで、こぶ平時代から継続して芸を見てもらい、忌憚のない意見をもらっている人々がいる。正蔵氏の芸を見つめるもっとも辛口のファンである。彼らは「メンター」のような存在なのだろう。

正蔵氏は自らを「長距離ランナー」と思っている。まだまだ芸に磨きをかけて、60歳代に大きく花開く姿を展望している。脳裏には高齢になってさらに面白さを輝かせた、故・三遊亭円生師匠や故・柳家小さん師匠らの高座がある。彼らも「ロールモデル」なのだろう。

3つの分野で「心の師」を持ち、精進を重ねる正蔵氏が、10年後どのような芸を見せてくれるのか、今から楽しみにしていたい。